

## 第1話…本当はかかっていない

「……ねえ、健人……。君は今から、僕のことを大好きな『彼氏』になるんだよ……。♡」

目の前で怪しく光るスマートフォンの画面。

優里が震える手で操作していたのは、あまりに安っぽい『催眠アプリ』だった。

そんなもので意識が飛ぶはずもない。

俺はあえて虚ろな瞳を作り、操り人形のふりをする。

——俺と優里は幼馴染だ。

家が隣同士で、気づけばいつも一緒にいた。進学先も、生活の節目も、自然と重なっていった。

「じゃあ、もう一緒に住もうか」

大学合格が決まった日。

優里がそう言い出した時も、俺は特別な違和感を覚えなかった。

彼の「身体の事情」を知る大人たちが、むしろ積極的に背中を押してきたのもある。

——他人には触れさせない、昔から厄介なその体。

それを知っているのは、家族と、そして俺だけだった。

……誰も知らない。

俺が、どんな気持ちで「唯一許された隣」に居続けてきたのかなんて。

事の起こりは、ほんの十五分ほど前に遡る。

晩飯を食べ終えたあと、優里がスマホをこちらに向けてきた。

「最近流行ってるらしいんだ。催眠アプリ」

「……は？」

「ほら、こうやって音声を通して、暗示にかけるんだって」

笑いながら言う声は完全に冗談のトーンだ。

「……試すくらい、いいだろ？」

向けられたスマホを持つ指先は、不自然なほど白く強張っている。

「効くわけないだろ、こんなの」

俺は鼻で笑いながら再生ボタンを押した。

《深く、息を吸って——》

胡散臭い合成音声流れ出す。

いつもなら「バカじゃねえの」と一蹴して終わるはずだった。

なのに、俺は視線を外せなかった。

目の前に座る優里が、獲物を狙う獣のような、あるいは何かに縋り付こうとする迷子のような……不安定な目をしている。

異様な熱を孕んだ瞳で俺をじっと見つめていたからだ。

《身体力を、ゆっくり抜いていきます》

声に合わせて優里がじわりと距離を詰めてくる。

いつもの仲がいい『幼馴染』の距離感なら、ここで「近すぎる」と笑って押し返していただろう。

それなのに、俺の喉元まで出かかった言葉を紡がない。

(……ここで、もし。効いたフリをしたら)

もし俺が正気じゃなくなれば。

理性や常識。幼馴染という呪縛を『催眠のせい』にして捨て去ることができたら。

ずっと、お前のその白い肌を、男として隠したいその身体を、俺だけのものにしたいという欲を……

——好きだ。

そんな綺麗な言葉で包み隠し、告げることができるのでは？

——ドクドクドクドク……

心臓が、耳の奥で警鐘のように鳴り響く。

「……ちよっと、ぼーっとする」

振られたら、冗談だ、催眠のせいだと誤魔化せる。そう気づいたら、掠れた声が出た。

優里の肩が、びくりと跳ねる。

「え。マジ……？」

「……分からないけど。頭が、重い……」

わざと視線の焦点をずらし、力を抜いて背もたれに体を預ける。

——沈黙。

テレビの音さえ聞こえない、静寂が部屋を支配する。

優里は俺の顔を覗き込み、慎重に、だが確実に、なにかの一線を越えようとする目で俺を観察している。

冗談で済ませるなら、まだ引き返せる。ここで「嘘！」と笑い飛ばせばいい。そして、「優里は本当に俺の言葉を馬鹿正直に受け止めるんだな」って言えば、「なにそれ！」って頬を膨らませて拗ねて、ご機嫌取りでコンビニまで一緒にアイスでも買いに行く。俺の奢りだからと、一番高いアイスを買って、「一口だけちょうだい」と戯れて……

でも、目の前の優里は笑わっていない。

それどころか、彼は俺の膝にそっと手を置いた。

その手のひらは、驚くほど熱く、汗ばんでいた。

「……ほんとに、効いてる？」

試すような、震える声。

ここで否定すれば戯れの時間で全部終わる。明日からもまた、綺麗な

幼馴染のままでいられる。

ああ、早く嘘だつて言え。たったそれだけで日常に戻る……

——…なのにな、俺は……

彼の手の熱に、脳が焼き切られるような悦びを感じて、戯れにできない、隠したい本音に気づいてほしくて、本当の嘘をついてしまう。

「……わからない、ぼんやりするんだ」

「……続けるね」

自分でも驚くほど、熱を帯びた声が出た。

優里は一瞬だけ息を呑み、そして、ゆっくりと再生ボタンを押し直す。

《今から、あなたは——》

音声が続く中、優里は床に膝をつき、俺の股の間に入り込んできた。見上げる彼の瞳には、もう冗談の色なんて一欠片も残っていない。そして、その瞳に映る俺の顔も、冗談にしては固すぎる表情をしていた。

「じゃあさ……」

震える指が、俺のベルトに掛かる。

「暗示をかけるの……試してみても、いい？」

——カチャリ

俺のベルトに優里の指が触れ、金属音が静かな部屋に虚しく響く。

優里は自分の行動に怯えるように肩を震わせながらも、俺を逃がさないと言わんばかりにその細い指先を俺の股間に食い込ませてきた。

「……『彼氏』なら、僕のこと、愛してくれるよね？」

その言葉で、はつきり分かった。

こいつも、俺を好きなんだって。

気づいたのに、本心を剥き出す勇気がまだ持てなかった。

俺たちの間にあった『幼馴染』という安全な防波堤が、音を立てて崩れていく

ここで騙したと知ったら、優里は傷つくのではないか。嫌われてしまうのではないか。そんな恐怖……

——違う。暗示にかかったフリをしていれば俺は欲望を剥き出せると気づいた。その身体も、何もかもを『催眠のせい』にして俺の腹の中に収められる。それで嫌われても、暗示をかけた優里のせいにもできる。なんて……こんな汚い感情を見せたくないとか怯えてしまう俺の防御反

応が、真実を言うことをためらわせた。

催眠、暗示、効いているフリ。

俺たちは互いへの醜い独占欲を剥き出しにし始めていた。

——この時点で、

もう引き返せないことに、俺は気づいていたし、優里も覚悟を決めていたのだって、わかっていた。



## 第2話…幼馴染はもう終わり

「……じゃあ、もう一回言うよ。君は僕のことを大好きな『彼氏』。僕の言うことは、絶対なんだから……っ」

優里の声は震えていた。

その奥に潜む支配欲が空気を熱くさせる。俺は無機質な人形を演じ、コクコクと頷いた。

そんな俺を見て、優里が自ら下着を引き下げる。

表れた陰毛の奥——そこには、男であるはずの彼には存在しない、女の裂け目がひっそりと、だが淫らに口を開けていた。

細い陰毛を掻き分けて覗くそれは、すでに蜜が膣奥から溢れ出していた。瑞々しく、熱を孕んで脈打っている。

男の体にあるはずのない、いやらしく、柔らかな雌の肉。その視覚的な暴力に、俺の理性が音を立てて焼き切れた。

「見て……っ。僕、本当は、こんな体なの……。普通の男の子とは、違う……っ」

自虐を吐き捨てる優里の瞳は、絶望と、同時に俺に暴かれることを待ち侘びる期待で潤んでいる。

その裂け目の周囲はすでに自身の熱で赤く火照り、溢れ出していた透明な愛液が、粘り気のある糸を引いて太ももを伝い落ちていく。

男の体格でありながら、そこだけが狂ったように甘い雌の匂いを放ち、部屋の空気を一瞬で欲情の色に塗り替える。

その湿った粘膜が、俺の指先を、そして俺のすべてを飲み込もうと淫らに誘っていた。

——ぬちゅ……、ちゅうう……♡

「ひゃうんっ!? ♡ あ、あ……っ。まだ、触っていいなんて、言っ……っ」

「……優里が、見せたから。……可愛くて、我慢できなかった」

「……っ! んあぁっ……♡♡」

催眠という免罪符が、俺を大胆にする。そして俺を獣を目覚めさせる。俺はベッドの端に優里を座らせ、開かれた脚の間に頭を埋めた。

「ひいっ!? あ、熱い……っ、そこ、息がかかっ……んっ♡」